

# 中有と冥界

——『日本靈異記』の蘇生説話——

小林 真由美

一

『日本靈異記』の蘇生説話の主人公たちは、死後数日してよみがえり、その間の体験談を語る<sup>(1)</sup>。多くは閻羅王の使いに冥界に連れて行かれ、亡父や亡母に会ったり、裁判にかけられたり、地獄の責め苦を受けてきたりする。死後の世界を往還する彼らは、何者なのか。死者の「魂」だろうか。「魂」とは何だろうか。

仏教では輪廻転生の過程を、「中有・生有・本有・死有」の「四有 (bhava—caustava)」と分析している。死から次の生を受けるまでの存在 (有) を「中有」、生まれる瞬間の存在を「生有」、生まれてから死の前までの存在を「本有」、死の瞬間の存在を「死有」とする。その「四有」を繰り返す状態が、輪廻転生である。無色界・色界・欲界の三界のうち、色界・欲界の衆生にはすべてこの四有があるという。

この説に従えば、蘇生説話で、死後の世界を訪問し、次の世に転生しないでもとの身体に戻ってくる何者かは、「中有 (antara-bhava)」に該当する。

「四有」は、説一切有部の『阿毘達磨発智論』に説かれて『阿毘達磨大毘婆沙論』『阿毘達磨俱舍論』などに詳しく注解され、大乘仏教に受け継がれた。法相宗所依の経論である『瑜伽師地論』巻第一にも説かれており、景戒も学んだものと思われる。

「四有とは、謂はく、本有・死有・中有・生有なり」と説くが如き、云何が本有なる。

答ふ。生分と死分を除ける諸蘊の中間の諸有なり。

云何が死有なる。

答ふ。死分の諸蘊なり。

云何が中有なる。

答ふ。死分と生分を除ける諸蘊の中間の諸有なり。

云何が生有なる。

答ふ。生分の諸蘊なり。

(『阿毘達磨発智論』巻第十九)

頌に曰はく、

死と生の二有の中の、五蘊を中有と名く。未だ至るべき処に至らず、故に、中有は生に非ず。

論じて曰はく、死有より後、生有の前に在りて、即ち彼の中間に、自體ありて起り、生処に至らんが爲めの故に此の身を起すなり。「(こは)二趣の中間なるが故に、中有と名く。」(『阿毘達磨俱舍論』巻第八)

総じて有の體を説かば、是れ五取蘊なり。「而して」中に於いて、位の別を分析して四と為す。一には中有。義は前に説くが如し。二には生有。謂はく、諸の趣に於いて生を結ぶの刹那なり。三には本有。生の刹那を除く死の前の余の位なり。四には死有。謂はく、最後の念にして、中有の前に次ぐものなり。

(同、卷第九)

当に知るべし、中有は無色界を除きて一切の生処にありと。

(『瑜伽師地論』卷第一)

「死有より後、生有の前」に「生処に至らんが為めの故に此の身を起す」(傍線部)のが「中有」だという。仏教的解釈をすれば、冥界遊行をしてもとの身に還ってくるのは、「中有」といわれる存在ということになる。

二

「中有」は「中陰」とも称される。現代も追善供養として行なわれる中陰法要の「中陰」である。「陰」は「五陰(五蘊)」のことで、人間(衆生)の肉体と精神を構成する五要素(色・受・想・行・識)である。

現代語の「中陰」は、中陰法要における四十九日間(七七日)の期間を示す語として用いることが多い。

ちゅうう【中有】(仏) 四有の一つ。衆生が死んで次の生を受けるまでの間。期間は一念の間から七日あるいは不定ともいうが、日本では四九日。この間、七日ごとに法事を行う。中陰。↓四十九日

(『広辞苑』第六版)

しかし、仏典語としての「中有」「中陰」は、「自體ありて」「此の身を起すなり」(前掲『阿毘達磨俱舍論』傍線

部)とあるように、存在する主体(體・身)を表す語であつて、期間の意味に用いるのは、二次的な用法である。中陰法要は、『続日本紀』に、文武天皇崩御の際に中陰法要を行なつた記事があり、白鳳時代より宮中で行なわれていたらしく、「中陰(中有)」の知識は、仏教徒以外にも早くから流布していたものと思われる。

『日本靈異記』に「中有」「中陰」という語はみられないが、中陰法要を示す記述が下巻第二十五縁と第三十七縁にみられる。下巻の説話が成立したと思われる奈良時代末期には、七七日の中陰法要が民間でも行なわれるようになっていたことが知られる。

下巻第二十五縁は、紀臣馬養が漁に出て暴風雨に遭つて遭難し、二カ月後に故郷に帰つた。馬養の妻子は馬養を見て言った。

「海に入りて溺れて死に、七々日を逕て、齋食を為し、恩を報ゆること既に畢る。思はずより外に、何すれぞ活きて還來る。もしは是れ夢か、もしは是れ魂か」といふ。

(下巻「大海に漂流れ敬ひて釈迦仏の名を称へて命を全くすること得る縁」第二十五) 下巻第三十七縁では、「京の中の人」が病気で急死し、「閻羅王の闕」に行つた。そこで佐伯宿禰伊太知という人が、閻羅王に罪を責められ、打たれて叫んでいるのを見た。「京の中の人」は蘇つてその様子を述べ、佐伯伊太知の妻子等はそれを聞くと、悲しみ哀れんで次のように言つた。

「卒にて七々日を經、彼の恩の靈の為に善を修ひ福を贈ること既に畢る。何にか凶らむ、悪趣に墮ちて劇しき苦を受くることを」といふ。更に法花經一部を写し奉りて、恭敬ひ供養し、追ひて彼の靈の苦を救ふ。此れまた奇異しき事なり。

(下巻「因果を顧ず悪を作ひて罪の報を受くる縁」第三十七)

佐伯伊太知の妻子は、七七日が過ぎてしまった今は、伊太知は閻羅王の裁定を受けて「悪趣に堕ちて劇<sup>時</sup>き苦を受」けているだろう、と嘆いた。これは、中有の期間は最長七七日で、それまでにならず何処かに転生するという仏典の説に基づいている。妻子は、すでに悪趣に転生したであろう伊太知の苦を救うために、法華経書写の供養を行なったという。七七日の転生についてはほかに、中巻「慳貪に因りて大蛇と成る縁」第三十八に、慳貪の僧が、死んだ後七七日を経て大蛇となってあらわれ、僧が錢を隠した室の戸の前に伏して、錢を護ったという説話がみられる。<sup>(3)</sup>

輪廻転生は、四有で示すと、次のような繰り返しになる。

……生有↓本有↓死有↓中有↓生有↓本有↓死有↓中有……

中有は、現世（生有↓本有↓死有）から来世（生有↓本有↓死有）へのつなぎ目である。人が死んで転生をせずに蘇生する場合は、次のような図式になる。

生有↓本有↓死有↓中有  
└──────────┘

中有から生有へと順調に進まずに、中有からもとの本有へと逆戻りするということがある。『日本靈異記』における蘇生説話は、すべて冥界遊行のモチーフをとめない、中有で何らかの体験をした後に蘇る。多くの者は、閻羅王の宮に連れて行かれた後、もとの体に戻されることになる。

蘇生説話でも、地獄などに生じてからもとの身として復活した場合は、地獄にいったん生じたということなの

で、次のような図式になる。

本有↓死有↓中有↓生有↓本有

また、『日本霊異記』には、もとの体が焼かれて失われていたために、違う人間の身体で蘇ったという説話（中巻第二十五縁）があるが、その場合はこのようになるだろう。

本有↓死有↓中有

本有

こうした図式は、仏教説話以外の、転生の觀念のない蘇生説話にはあてはまらない。神話などでは生の世界に対する死の世界があり、その往復という構造になる。

生の世界 ↔ 死後の世界

イザナキイザナミの黄泉の国訪問神話は、次のようになる。

葦原中国（生の国） ↔ 黄泉国（死の国）

仏教説話としての蘇生説話は、生と死の往復の物語ではなく、輪廻転生の規則的な永久の繰り返しの中に生じた、小さな乱れの物語なのである。

『日本靈異記』にみえる最初の蘇生説話は、上巻「三宝を信敬ひて現報を得る縁」第五である。大部屋栖野古連公は、聖徳太子の肺腑の侍者で、敬虔な仏教信者であった。聖徳太子の死後出家を望んだがかなえられず、四年後の推古天皇三十三年十二月八日に急死した。天皇は七日間遺体を留めて、屋栖野古の忠信を偲んだ。

三十三年乙酉の冬十二月の八日に、連公難破に居住みて急に卒ぬ。屍に異しき香有りて飜馥る。天皇勅して、七日留めしめ、彼の忠を詠はしめたまふ。三日を逕てすなはち蘇甦る。(上巻第五縁)

屋栖野古は蘇った後に、自分は五色の雲の道を渡って、聖徳太子と文殊菩薩に会ってきたという話を語った。屋栖野古が蘇ることができたのは、天皇が、遺体を「七日留めしめ」たためであった。(4) では本有に戻るための肉体が保存されているということが必要条件となる。

『日本靈異記』には、上巻第五縁を入れて、十三の蘇生説話がみられる。肉体を保管した理由と、死後蘇生までの日数についてみてみる。

〈上巻第五縁〉 大部屋栖野古連公。天皇が七日間とどめた。三日後に蘇る。

〈上巻第三十縁〉 膳臣広国。理由無し。三日後に蘇る。

〈中巻第五縁〉 一の富める家長公。「十九日置きて焼くことなかれ」と遺言。九日後に蘇る。

〈中巻第七縁〉 釈智光。「九日十日置きて待て」と遺言。九日後に蘇る。

〈中巻第十六縁〉 一の富める人。「七日置け」と卜者に託宣。七日後に蘇る。

〈中巻第十九縁〉 利苅優婆夷。理由無し。三日後に蘇る。

〈中巻第二十五縁〉 鶴垂郡の衣女。三日後に蘇ろうとしたら自分の身が火葬にされていたので、かわりに布

敷臣衣女の身となつて蘇る。

〈下巻第九縁〉 藤原朝臣広足。親属が「喪殯の物を備く」。三日後に蘇る。

〈下巻第二十二縁〉 他田舎人蝦夷。妻子が「丙年の人なるが故に焼き失はず」とし、「地を点めて壑を作り、

殯して置く」。七日後に蘇る。

〈下巻第二十三縁〉 大伴連忍勝。眷属が「殺人の罪を断らしめよ。故に輒く焼き失はず」と言つて、「地を点

めて冢を作り殯り収めて置く」。五日後に蘇る。

〈下巻第二十六縁〉 田中真人広虫女。理由無し。「七日を遷て、焼かずして置く」。其の七日の夕に「蘇る。

〈下巻第三十五縁〉 火君の氏のひと。理由無し。日数不明。

〈下巻第三十七縁〉 京の中の人。理由無し。日数不明。

遺体の保存理由は、遺言や託宣によつて遺体をとどめて置かせる場合が三例、「喪殯」の準備のための場合（下巻第九縁）、丙年生まれのため（下巻第二十二縁）、殺人の証拠保存のため（下巻第二十三縁）、が一例ずつある。これらの蘇生説話の中に「喪殯」（下巻第九縁）「殯して置く」（下巻第二十二縁）「殯り収めて置く」（下巻第二十三



縁」と「殯」の語がみられる。それが喪屋や殯宮を建てて遺体を仮安置する、古来の「モガリ」「アラキ」であったかどうかは分からないが、火葬ではない葬法であったことが伺える。<sup>(6)</sup>

また、体が火葬にされてしまったため、蘇生できなかった説話、下巻第三十六縁がある。藤原朝臣永手は閻羅王に帰されることになったが、

「すなはち閻羅王、我れを免して擯おひ返したま祝たまふ。然れども我が体滅びて寄宿よる所無し。故に道中に漂ふ」といふ。  
(下巻「塔の階を滅し寺の幢をた仆たして悪しき報を得る縁」第三十六)

と、もとの体に戻れないために、「道中」にさまよっているのだという。「道中」は、六道のどこにも往けないために、「道（世界）と道の間」をさまよふということだろう。

經典によると、中有は、死後七日以内に生縁を得て、次の生を受ける。七日以内に生縁が定まらず転生しない場合は、もう七日間延長される。どんなに遅くとも、七期目（七七・四十九日）までには転生するという。

尊者世友は言ふ、「此れの極多は七日なり。若し生縁未だ合はざれば、便ち数死し、数生ず」と。

有余師は言はく、「極は七七日なり」と。  
(『阿毘達磨俱舍論』卷第九)

又此の中有は若し未だ生縁を得ざれば、七日を極として住す。生縁を得るあらば即ち決定せず、若し七日を極として〔尚〕未だ生縁を得ざれば、死して復た生じ、七日を極として住す。是の如く展転して、未だ生縁を得ざれば、乃至七七住す。  
(『瑜伽師地論』卷第一)

『日本靈異記』説話では、不明のものもあるが、ほとんどが七日以内（三日・五日・七日）に蘇っている。中巻第五縁と第七縁だけが蘇生までに九日かかっている。七七以内のことではあるが、『日本靈異記』説話の中で

は例外的である。

中卷「智しき者変化の聖人を誹妬せりなたみて現に閻羅の闕に至り地獄の苦を受くる縁」第七の智光は、行基誹謗の罪によつて閻羅王に召され、三日間ずつ三回、地獄で責め苦を受けてきた。この地獄巡りを一旦地獄に「転生」したものと考えると、中有の期間とは異なつてくるので、例外的に九日になつたとも考えられる。

中卷「漢神の崇に依り牛を殺して祭りまた生いさまものを放つ善を修おこなひて現に善と悪との報を得る縁」第五は、摂津国の「ひら一の富める家長公」が七年間の重病の末に亡くなり、九日後に蘇つたという説話である。閻羅王の宮で、漢神の生贄に祭つた牛が七人の牛頭人身の獄卒として現れ、家長公を膾にして食おうといい、一方では、家長公が放生した生き物たち千万余人が家長公をかばい、双方が言い分を譲らなかつた。八日を経て、閻羅王が「明日に参ま向うでよ」と言い、九日目に集会したところ、多数決により家長公は放免という裁定だつた。七日以内に決着が着かなかつたので、八日目に閻羅王が腰をあげ、九日目に裁定を下したということだろうか。

#### 四

中有は、どんな姿をしているのだろうか。『阿毘達磨大毘婆沙論』などによると、中有は、来世の本有の姿をしているという。また、極細なので肉眼で見ることができないのだという。

問ふ、一切の中有の形状は云何ん。答ふ、中有の形状は、当本有の如し。謂く、彼の当に地獄趣に生ずべき者の所有の形状は、即ち地獄の如く、乃至当に天趣中に生ずべき者の所有の形状は、即ち彼の天の如きなり。

中有と本有とは、一業の引くものなるが故に。

(『阿毘達磨大毘婆沙論』卷第七十)

当に何れの趣に往く可き、所起の中有の形状は如何。

此は一業を引く故に、当の本有の形の如し。

(『阿毘達磨俱舍論』卷第九)

論じて曰はく、此の中有の身は同類のみ相見る。若し極淨天眼を修得すること有らば、亦た能く見ることが得。諸の生得の眼は、皆観ること能はず。極細なるを以ての故なり。

(同)

中有は「極細」の姿で、業に引かれて次の生有へと移動するということらしい。中有が生縁を得るまでの様相については、『正法念処經』卷第三十四に、十七種にわけて説かれている。『正法念処經』の説は『諸經要集』四生部中陰縁、『法苑珠林』受報篇中陰部にも引用されている。また、中有の姿が「小兒の如し」(『灌頂經』卷第十一)という説もある。

『日本靈異記』では、特に冥界遊行の際の主人公の外見に関する記述はない。「七人の非人有り。牛頭人身なり。我が髪に繩を繋けて捉へて衛み往く」(中巻第五縁)と、髪の色があることがわかる程度である。死者は死の床から徒歩で冥界に連れていかれるようであるが、その姿はまわりのものには見えないようである。經典にあるように「極細」で見えないとすることができ。

「中有」には、「健達縛」「求生」「趣生」「起」などのいくつかの異名がある。その一つの「健達縛」(gandharva)は、「食香」と漢訳される。中有は香を食べ、香を尋ねていくからだという。

諸の少福の者は、唯、悪香のみ食し、其の多福なるは好香を食と為す。(『阿毘達磨俱舍論』卷第九)

「多福なるは好香を食と為す」とあるが、上巻第五縁の大部屋栖野古の遺体からは芳香が漂っていた。屋栖野

古は三日目に蘇って、死後の体験を語った。

三日を逕てすなはち蘇甦よみがへる。妻子に語りて曰はく「五色の雲有り。霓にじの如く北に度わたる。其より往きて、其の雲の道芳しきこと雞舌香の如し。道の頭まへを觀れば、黄金の山有り。」

(上卷「三宝を信敬ひて現報を得る縁」第五)

虹のような五色の芳香の雲の道を渡っていったという。芳香は、屋栖野古が「多福」の者であつたからと解することもできよう。

また、「少福の者は、唯、悪香をのみ食し」(『阿毘達磨俱舍論』卷第九)は、下卷第二十六縁の半牛半人として蘇つた女から悪臭が漂つていたことを想起させる。

其の七日の夕に、更甦よみがへ還りて、棺の蓋おの自づから開く。是に棺に望みて見れば、はなはだ臭きこと比たくひ無し。腰より上の方は、既に牛と成る。

(下卷「強ひて理にあらざして債もののかひを徴りて多く倍まして取りて現に悪しき死の報を得る縁」第二十六)この説話は、慳貪な田中真人広虫女が死んで七日目に棺おけがひとりでに開き、中を見たら、上半身だけが牛になって蘇つていたという、衝撃的な説話である。

半人半牛になって蘇つたとは、転生に失敗したのだろうか。広虫女が死ぬ前に見た夢の中で、閻羅王が広虫女の三つの罪をあげて「現報を得べし。今汝に示すなり」と告げたというので、転生ではなく、半身が牛となって現世に蘇るといふ「現報」である。牛人間になつた広虫女は、牛のように地面の草を食んでは反芻し、衣類を着ずに裸で地べたに伏し、五日後に死んだという。

香に関する説話として、前掲の下巻第三十六縁がある。藤原朝臣永手の子家依いよは、永く病を患っていたが、一人の禪師が病氣治癒のために身代わりになろうと、手の上に香を置いて焚き、行道して陀羅尼を読んだ。すると、家依に死んだ父の永手が憑いて語った。自分は生前、法華寺の幢を倒させ、西大寺の塔を八角から四角にして七層から五層に減らした。その罪のために閻羅王の宮に連れて行かれ、火の柱を抱かされ釘を手に打ち立てられていたが、宮の中に煙が充満してきて、禪師の手の上にたいした香だとわかると、閻羅王は自分を追い帰した。しかし、体が火葬されてしまっているので依るところがなく、故に道中をさまよっているのだという。

禪師が身を捨てて香を焚いたために、永手は責め苦から免れることができた。追善供養に香を焚くことの勧めとして成り立つ説話である。

中有の異名の一つ「求生」については、次のように述べられている。

二には求生。常に喜びて当に生ずべき処を尋察するが故なり。（『阿毘達磨俱舍論』巻第十）

「当生」は来世のことで、中有は常に次の生を喜んで尋ねるといふ。中巻第七縁の智光は、地獄の熱気が「極めて熱くして悩むといへども、心は近就かむと欲おもふ」とあり、下巻第二十二縁の他田舎人蝦夷が冥界で、熱く焼けた鉄と銅の柱に抱きつきたくなつたとあるが、「常に喜びて当に生ずべき処を尋察する」といふ中有の性質によるものだろうか。

鉄と銅と熱しといへども、熱きにあらず安しづかにあらず。編みたる鉄重しといへども、重きにあらず軽きにあらず。悪しき業に引かれ、ただし抱き荷はむと欲ふ。

（下巻「重き斤はかりをもちて人の物を取りまた法花経を写して現に善と悪との報を得る縁」第二十二）

傍線部の「悪しき業に引かれ」は、前掲の『阿毘達磨大毘婆沙論』や『阿毘達磨俱舍論』に似た表現がみられる。中有と次の本有は「一業に引かれている」ので、中有は来世の本有の姿をしているというのである。地獄という来世にも惹かれてしまうのは、「一業を引く故に」なのであろう。

中有と本有とは、「一業の引くものなるが故に」。

（『阿毘達磨大毘婆沙論』卷第七十）

此は「一業を引く故に」、当の本有の形の如し。

（『阿毘達磨俱舍論』卷第九）

## 五

「中陰」は、四十九日の「期間」を示す意味合いを強めていったが、「中有」は空間的な意味合いにとらえられていったようである。中世以後、「中有に迷う」「中有の旅」という表現がしばしば用いられるようになり、虚空や空中の意味をかけて「宇宙」の表記も用いられた。<sup>(7)</sup>

イヤなふ四十九日が其間、魂宇宙に迷ふと聞く。

（浄瑠璃「一谷嫩軍記」）

しかし、仏典語の「中有」は場所や空間をさすのではなく、死と生の間の身体、存在をいうのである。天人・阿修羅・餓鬼・畜生・地獄の六道（六趣）ではなく、中有という世界があるのでない。中有はどこかの異空間ではなく、「死する処に生ずる」とされる。

若し爾らば、中有も亦、是れ趣なるべし。

爾らず。趣の義と相応せざるが故に。趣とは謂はく往く所なり。「然るに」中有を説きて是れ往く所とは

言ふ可からず。(是れは)即ち死する処に生ずるが故なり。

(『阿毘達磨俱舍論』卷第八)

本来中有は空間としての意味はなかったのだが、漢訳經典の中にも、中有を一つの世界のように記しているものもみられる。姚秦の竺仏念訳『中陰経』について、次のような解説がある。

般涅槃後に仏が中陰(中有)になり、しかも説法するという構想にも驚かされるが、経中に、妙覚如来が「神力を以て中陰中に入り、七宝の高座(中略)を化作し」云々とあるなど、中陰という世界がこの世界とは別に存在していると誤解している節もあり、この經典が、仏教の世界観をいまだ十分には消化していない異文化の所産であることを偲ばせる。

(『大蔵経全解説大辞典』、『中陰経』の項、解説加治洋一)

加治氏は『中陰経』が偽経である可能性を示唆しているが、もし中国作成の偽経だとすると、中有を一つの世界として誤解することがあるのは、日本だけではないということになる。それは、死後の世界の観念を多くの民族が有しているために、同じように混同する傾向があるのだろう。

閻魔王の原型である古代インドのヤマ王も、『リグ・ヴェーダ』には死者の世界で祖霊と共に饗宴を楽しむ様子が描かれている。やがて冥府王の閻魔王信仰が成立し、中国の仏教説話では、閻魔王の冥府の様子が、現実の官府そのままに描かれる。主人公が死ぬと使者に連れられて城門に入り、中の官府において閻魔王はじめ諸官による裁判を受けることになる。

冥史の為に撰せられ南行して門に入る。門内の南北に大なる街あり。左右を夾みて行き往くに官府の門舎あり。

(『冥報記』中巻第十五話)

『日本霊異記』でも、多くの場合閻羅王の使いに冥界に連れて行かれるが、その途中に、道があり、野があり、

坂がある。

行く路広く平たひらかにして、直きこと墨繩の如し。

(中巻第十六縁)

使四人有り。共に副ひ将て往く。初に広き野に往き、次に卒まがしき坂有り、坂の上に登りて大なる觀たむの有るを觀る。  
(下巻第二十二縁)

また、「大河」(上巻第三十縁)や「深い河」(下巻第九縁)もあり、野外をはるばると歩いていく描写である。中国のものには、道中の描写はあまり見られない。着いた先には楼閣や宮や閻羅のみかどがあるが、中国仏教説話の官府のような具体的な描写はなく、諸氏の指摘の通り、中国仏教説話の冥界とは大分趣を異にしている。

『日本靈異記』の冥界は、「閻羅国」「閻羅闕」のほか、「黄泉」とも称される(上巻第三十縁、下巻第三十五縁など)。中巻第七縁の智光の蘇生説話では「慎ゆめ黄泉つ竈の火の物を食ふことなかれ」とある。「葦原国に名と聞とある智しき者」ともあり、「葦原中国↑黄泉国」という日本神話的世界観がみられる。

また、上巻第三十縁などには「度南国」と称されている。これは、道教において、死者の魂が煉度され仙となる所である「南宮」の伝承を背後に持っているという。<sup>(9)</sup>「南宮」が、不死の仙の世界への中継的世界であるという点に、「中有」との共通点が見出せる。

このように、『日本靈異記』の冥界は、中国仏教説話の影響を強く受けながらも、異なる要素の多い世界である。上巻序によると、中国説話集は、「他国の伝録」であるので、「自わが土くにの奇あやしき事を信うやまひ恐おそ」るために『日本国現報善悪靈異記』を編纂したという。つまり、『日本靈異記』は「自わが土くに」「日本国」の伝録なので、「他国(漢地・大唐)」の説話のすべてを模倣する必要がなく、日本には日本の冥界があつてしかるべきということにな



ろう。景戒は、生死輪廻、四有という確立された仏教的概念の上に、仏教以外の要素も取り込んで、「わ我が土」の冥界を構築したのである。

『日本靈異記』蘇生説話には、仏教、道教、日本古来の冥界伝承などが何層にも習合している。それは、景戒や、景戒以前の説話伝承者らの、仏教以外の従来の信仰や伝承を排除するのではなく、方便として吸収、融合をめざし、聴衆や読者を獲得して、日本においてひろく法を伝えていこうという意識によるものだと思われる。

『日本靈異記』の蘇生説話の主題は、生前の善と悪が死後の運命を定めるといふ、因果応報の理である。それは、冥界を体験してきた奇跡の蘇生者のみが伝え得る「真実」である。すなわち、全体の一割以上も点める蘇生説話は、巧みに読者の興味を引きつつ、因果応報の理を伝えようとしているのである。

## 六

日本人の他界観は、『日本靈異記』にみられるように、仏教的観念を受け入れつつ展開していった。

井之口章次氏は、正式の仏教渡来以前に、仏教ふうの他界観が入って日本人の他界観に強い影響を与え、やがて、奈良時代以降の高僧たちが、従来の他界観はそのまま認めた上で、より整備された仏教の来世観を、霊肉分離の期間にあてはめたのだらうとして、

日本人の他界観念には異質のものが（程度のちがいかもしれぬが）かさなり、からまり合って、少くとも二重の構造をなしている、と言えるように思う。（『日本の葬式』）

と述べている。

「中陰」の觀念も、各地においてさまざまな民間儀礼に融合していった実例が、民俗学の調査によって紹介されている。現代においても、「四十九日間は死者が軒端に在る」といった言葉が、少なからぬ実感を持って語られている。死という不在を受け入れる期間として、四十九日間がちょうど適合しているのだろう。

死によって靈魂と肉体が分離すると考える日本人にとって、中陰法要や、初七日から三回忌までの十仏事は、靈魂が肉体を完全に離れ、遠い他界に旅立ち、カミ、ホトケと呼ばれる祖靈になるまでの期間として習合して受け入れられた。現代では一般的に、追善供養は三十三回忌を弔い上げとし、それ以降も五十回忌ごとに行なうことがある。そうした長期間にわたる供養は、仏事供養が、本来の仏教的輪廻転生の概念から離れ、祖先礼拝として定着したことを物語っている。『日本靈異記』の蘇生説話には、「中有」の日本的解釈といえる冥界が描かれているが、仏教が日本人の死生觀に深くくいこんだ形で根をはり始めている様子がうかがえるのである。

### 注

(1) 蘇生のモチーフのある説話はすべて「蘇生説話」として分類した。

(2) 「辛巳、天皇崩りましぬ。」「壬午、(中略)黄文連本実等を以て殯宮の事に供奉らしむ。拳哀、着服、一ら遺詔に依りて行はしむ。初七より七七に至るまで、四大寺に設齋す。」(『続日本紀』慶雲四年六月)和田萃氏は、宮廷における殯と中陰法要について、次のように述べている。「殯が営まれたことが記録に明らかなのは文武天皇までである。そして元明太上天皇以後は、崩御の日から埋葬までがさらに著しく短縮され、例外はあるが、それはほぼ初

七から三七忌内であり、七七日の間は七日目ごとに追善供養を行い、死者の冥福を祈っていて、明らかに仏教思想によっていることが知られ、文武天皇以前とは明瞭な差がある（『殯の基礎的考察』『史林』第五十二巻第五号、一九六九年九月）。

(3) 小林信彦氏は、僧が死んでから蛇が成長しきるまでを四十九日とするには短すぎることから、仏教の「心の移転」ではなく、日本人が身体から自由に離脱できると考えた「たま」が、蛇に取り憑いたものであると述べている（小林信彦『日本霊異記』中巻第三八話に描かれる「たま」の文化―日本人が仏教を受け入れなかった背景―、『説話論集』第五巻、一九九六年）

(4) 「彼の忠を詠はしめ」（上巻第五緑）は、殯儀礼における「詠」である可能性もあるだろう。宮廷において、殯庭における詠が導入されたのは安閑朝末年だという（和田萃前掲論文）。『日本霊異記』巻頭説話にも、小字部栖軽が死んだとき、「七日七夜彼の忠信を詠はしめたまふ」とあり、同様の儀礼と考えられる。七日間という期間は、陰法要の影響もあるのかもしれない。『日本書紀』に記録されている殯は天皇や皇太子の記録が殆どであるが、天智天皇八年藤原鎌足の殯の記事もあるので、忠臣は宮廷で殯を行なうという認識があったかもしれない。

(5) 「十九日」について、松浦貞俊『日本国現報善悪霊異記注釈』に次のような注がある。「想ふに「十」又は「于」は「卅」の誤歟。「中陰四十九日間」の謂か」。

(6) 出雲路修校注『新日本古典文学大系30 日本霊異記』、「地を点めて壑を作り、殯して置く」（下巻第二十二緑）の脚注に、「殯」を、諸注は「もがり」と訓み、「葬」の前段階のように解するが、疑わしい。賊盜律、およびその疏では、「殯」はその次の段階に「葬」を予想してはいない。墳墓をつくりその中に収める、というかたちで葬ることを「殯」というのであろう」とある。また、同説話の「丙年の人なるが故に焼き失はず」の注に、「本書では、

死骸が火葬されずに保存されたことの理由が記述される説話が多い」こと、「中国説話の世界に広くみられる、体がまだ温かかったので葬らなかつた」という理由のものはみえないという指摘がある。

- (7) 「宇宙」は「宇宙」の同意語。近代においても「宇宙」を「宙宇」とすることがあり、宮沢賢治の使用語彙にも「宙宇」があつた。「宙宇は絶えずわれらによつて変化する」（『生徒諸君に寄せる』）。私は、「中有」と「宙宇（宇宙）」の連想により、銀河鉄道を思い出す。宮沢賢治は、死後間もない魂は、中有<sup>11</sup>宙宇、すなわち宙宇を渡つて旅立つていくと空想したのではないか。『銀河鉄道の夜』は、宮沢賢治による、近代における「中有」の物語としても読めるのではないだろうか。

- (8) 出雲路修「よみがへり考」（『説話集の世界』）、入部正純「日本霊異記における冥界」（『日本霊異記の思想』）、西村亜希子『冥報記』と『日本霊異記』の冥界（『成城国文学』第二十号、二〇〇四年三月）など。

- (9) 注(8)出雲路氏論文参照。出雲路氏は上巻第三十縁・第三十五縁・第三十七縁の三話について、「九州に関係ある人物が、死に、蘇生し、その事件を文書にした」という共通祖話があつたことを推定し、「蘇生」を述べた共通祖話に〈冥界游行〉を述べた部分を注入して、形成されたものであろう、「中国の志怪小説——きわめて多様な〈冥界游行〉説話に満ちている——との接触が、死後の世界に対する関心を高め、〈蘇生説話〉を〈冥界游行説話〉へと変貌させたのではなからうか」と述べ、「よみ」が「黄泉」と表記されるようになり、やがて閻魔王の冥界伝承に習合していく過程を証している。